

PURE

風 *fuu*

ピュア

C o n t e n t s

P U R E 2 5

特別番外編
なくてはならないもの 339

P U R E 2

左手薬指の指輪を、早瀬川愛美はため息とともに見つめた。

こんな大きなダイヤモンドの指輪を、指に嵌めている自分が信じられない。

婚約の証……彼女に、そして彼女の住まいであるこの古いアパートに似つかわしくない指輪……このとんでもなく高価に違いない指輪だけが……この場で浮いて浮いてしまっている。

でも……彼は愛美に、どうしてもこの指輪を受け取って欲しかったのだ。ふたりの繋がりを、もつと強固なものとするために……

けれど彼の両親は……愛美の親友である藤堂蘭子の姉、橙子との縁談を望んでいるのだ。

心にキリキリと刺すような痛みが走り、愛美は胸を押さえて息を吐き出した。

不破を愛している。けれど、周りはふたりのことを祝福してはくれなさそうだ。

彼と一緒にいたい。彼女の望みは、ただそれだけなのに……

「……優誠さん」

彼の名を口にしたこと、ようやく止まつた涙がまたも湧き上がつてくる。愛美は唇を噛んで泣くのを堪えようとした。

明日、不破はアメリカに行ってしまう。

出発は明日でも、もう逢えない愛美にとつては、行つてしまつたと同じこと。

頬を伝い落ちる涙を拭い、愛美は大きな宝石を見つめると、ため息をつきながら指輪をくるりと半回転させた。

この指輪はアメリカに住んでいる不破の祖母のものだ。愛するひとができたら贈るようにと、祖母からもらつたと不破は言つていた。その指輪が、いま愛美の指に嵌められていることを、彼の祖母は許してくれるだろうか？

なぜだか、不破の祖母に対して詫びたい気持ちになつてしまふ。

彼女は指輪をつけたまま、石の思いを感じようとして手を握り締めた。

なんとなくそうすることで、この石が愛美を歓迎してくれているかどうかわかるような気がしたのだ。

愛美の勝手な思い込みかもしれないが、少なくとも拒絶のようなものは感じなかつた。

不破と愛美の婚約を祝ってくれる者が、誰かひとりでもいるのだろうか？

そう考えた彼女の脳裏に、桂嶺百合の顔がぽんと浮かび、心に温かいものが湧き上がつた。

愛美の、もうひとりの親友……彼女だけはきっと祝福してくれる。迷いなくそう思えた。

自分の部屋の畳に座り込んでいた愛美は、ゆっくりと立ち上がり、指輪を外してケースに戻すと机の引き出しの奥にしまい込んだ。この指輪を嵌めたままなんてことはできないし、万が一にも失くしたら大変だ。

愛美は喉元の首飾りについている薔薇に、指先でそつと触れた。

不破から誕生日のプレゼントにもらった首飾り……

これだけで良かつたのに……

鬱々と考え込んでばかりいた愛美は、百代の声が聞きたくてたまらなくなつた。

彼女はバッグから急いで携帯を取り出した。

「愛美、誕生日おめでとう」

電話が繋がった途端、百代の明るいお祝いの声が飛んできた。百代の屈託のなさに、愛美はほつとしたものを感じつつ、嬉しさを噛み締めた。

「ありがとう」

「楽しかったの？」

「うん……楽しかった」

不破からプロポーズされたこと、そして婚約指輪をもらつたことを百代に話そうか迷つたが、愛美は結局口にできなかつた。

百代と話していると、自分が高校生だということを強く意識してしまう。

婚約などという単語を口にするのは、なんだか滑稽な気がした。

「それで、彼からの誕生日のプレゼントは？ 何もらったの？」

「えっと……首飾り、白い薔薇がついてるの」

愛美は首飾りの薔薇を指でもてあそびながら答えた。

「今度、見せて」

「うん、明日。あ、あの百ちゃん、わたしね、話したの、高校生だつてこと」

「ほお、で、彼、なんて？」

「驚いたと思うけど……思つてたより、すんなり受け入れてくれたみたいだつた」

「そつか。良かつたじやん。それじゃあさ、秘密もなくなつたことだし、今度会わせてよ、彼に」

「あ、うん。でも……明日から一ヶ月逢えないから……」

暗い思いに囚われ、愛美は泣きそうになりながら答えた。

「どうして？」

「仕事でアメリカに行くって」

「そうなの？」

不破の不在が心に影を落とし、愛美は言葉にできないほど辛い気分でいるというのに、返つてきました百代の言葉はずいぶんと明るく嬉しげだった。

「ちょうど良かつたわ」

「ちょうど……良かつた??」

「あの、百ちゃん、何が？」

「作戦を練つてることなのよ。愛美にも、どうしても参加してもらわなきやならないのにさ……愛美の彼氏、ちよつと邪魔だなつて思つてたのよね。あはは。神様、ずいぶんと気が利くじやん」

作戦？ 参加？ 不破が邪魔？ 神様……？ 気が利く？

愛美は頭の中でそれらの単語を復唱し、最後に憤りに駆られて頬を膨らませた。

百ちゃん、わたし、死ぬほど淋しい思いをしてるんですけど……なのに、そんなに喜ぶなんて

……あんまりだわ。

もちろん、そんな言葉は恥ずかしそうで口にできない。不服を胸に抱きつつも、愛美は百代の言葉の謎に興味を引かれた。作戦とは、いつたいなんなのだろう？

「百ちゃん、何を企んでるの？」

「いずれ時が来たら話すわ。それじゃ、明日ね。バイ！」

バイ！ の言葉の後に、ブチッと通話は切れた。

愛美は切れた携帯を見つめて眉を寄せた。

1 心からの謝罪

学校に向かつて歩きながら、愛美はずつと不破からもらった携帯を手に握り締めていた。

不破がアメリカに発つたのは昨日の午前中。飛行時間は、約十二時間だと言っていたから、 昨夜の十時くらいには到着しているはずだ。時差は十四時間という話だったから……

愛美は携帯で時間を確かめて、頭の中で時差を計算した。

いま、日本は朝の七時半、とすると、不破の時間は……夕方の五時半？ それも昨日の……

自分の考えていることが、途方もないことに思えてきて、彼女は大きく息を吸つて吐き出した。

いま、この時……彼は遠い異国の地で、何をしているのだろうか？

いつ電話がかかってくるかわからないし、もし気づかなかつたらと思うと不安で、どうしても携帯から目を離せない。サイレントをやめて、マナーモードに設定を切り替えておくべきだろうか？ 後になつて、電話がかかってきていたなんて知るのは辛すぎる。けれど、授業中では出たくても出られないのだ。

……それでも、かかつてきたと気づくことはできるのだし、知らずに終わるよりは、ずっとましではないだろうか？

もんもんと考えていても疲れ、愛美は立ち止まって俯き、地面に向かつて重いため息を落とした。

アメリカに行くなんて聞かなければ良かつたのかもしれない。ただ、忙しくて逢えないだけなら、こんなに虚無感を持たずに済んだかも……
不破の存在が……愛美の世界の中で薄れてゆくようだたまらない。

「早瀬川」

足元を見つめていた愛美は、突然呼びかけられ、驚いて顔を上げた。クラスメートの櫻井比呂也だ。さくらいひろや

うろたえた愛美は、携帯を制服の上着のポケットに入れた。

「櫻井君、お、おはよう」

「おはよ」

「今日は早いのね？」

櫻井は、いつも始業時刻直前にしかやつて来ない。全速力で走り、ぎりぎりに教室に滑り込むのを日課とし、それをゲームのように捉えているらしかった。もちろん、時々アウトになる……

「お前を待つてたんだ」

思わず発言に眉を上げ、愛美は櫻井を見つめた。

「わたし？」

「どうして？」

突然手を伸ばしてきた櫻井は、愛美的腕をぐつと掴んだ。

「ちよつと来いよ。こんなところで立ち話なんかしてたら、目立つちまう」

ひとり言のようにブツブツ呟きながら、櫻井はさも当然のように彼女を引っ張つてゆこうとする。

「い、いつたい、何？　どこに行くの？」

混乱した愛美は、櫻井に抗つた。

いつたん立ち止まつて舌打ちした櫻井が、なぜか睨んでくる。

「何もしやしないって」

「ここでいいじやない。話なら」

「込み入った話なんだよ。いいから素直についてくればいいんだよ」

櫻井の身勝手さに愛美はむつとした。どうして愛美が、彼に叱られなければならぬのだ。なぜ櫻井の命じるままに、のこのことについてゆかなければならぬのだ。

「櫻井君、勝手すぎるわ」

「言われなくともわかってるよ」

すでに開き直っている櫻井の強引さに敵わ^{かな}ず、結局愛美は、報道部の部室に連れ込まれた。彼は愛美を先に部屋に入れ、自分は人気のない廊下をさんざん窺つたあげくドアを閉めた。異様に見える櫻井の行動に、愛美はさらに戸惑つた。

「あの……話つて何？」

「まあ、座れよ」

勧められた椅子に仕方なく腰かけると、櫻井も愛美の前に座り込んできた。

「正直に答えてくれよ。この間みたいなのはなしだ」

いやに真剣な顔で、櫻井は言つた。

「この間？」

「あの、なんのことやら、さっぱりわからないんだけど？」

櫻井は苛立^{こだつ}ちをあらわに、拳と手のひらを打ち合わせた。

「ほら、この間、駅のホームでお前を助けてやつた後、俺の車で家まで送つてやつたろ？」

「ああ。あの時はありがとう」

「礼はもういい。あん時さ、桂崎のこと話したろ？」

「百ちゃん？」

「そういえば、そんな話をしたよ……」

「したかな？」

「したんだよ！」

櫻井のイラついた大声にぎょっとした愛美は、後ろにそつくり返った。

「あ、悪かった。つい……」

櫻井は気まずげに謝り、自分を罵るよう^(のの)に舌を鳴らした。

「桂崎が特殊な能力を持つてるのかって、俺、聞いたろ？」

愛美は眉を上げた。

「で、それがなに？」

「おっ前なあ」

櫻井の今度の叫びは悲鳴に近かつた。彼は顔を歪め、氣を取り直そうとしてか一度深呼吸し、傍目には落ち着いた声で話し出した。

「そういう風に、この話題をさらりと流すな。頼むから」

「あの、櫻井君の言いたいことが、まるでわかんないんですけど……」

首を傾げつつ彼に問いかけた愛美に対して、櫻井は平手で思い切り机を叩いた。

もちろん愛美は驚いて飛び上がった。

「な、何？」

「つまりだ。俺は桂崎の真実が知りたいんだよ」

真実？

「へ？」

「なんかお前、わざとやってないか？」

疑わしげな櫻井の顔と声に、愛美はぽかんとした。いつたい彼は何を言い、何を愛美に求めているのだろう？ さっぱりわからない。

「だからな。桂崎に、本当に特殊能力があるのかって聞いてんだよ」

「ああ。そのこと」

ようやく飲み込めた。

「そうだよ。それで？」

愛美は、どこか繋るような目を向けてくる櫻井を、眉をひそめて見つめた。

「百ちゃんの能力って、櫻井君は、何を指して聞いてるの？」

「なんでもだよ。とにかく普通じゃ考えられないような超能力とかだ。あいつ、ほんとに使えるのか？」

「どうしてそんなことが聞きたいの？」

愛美は用心深く尋ねた。彼は百代の不思議な力について、記事にしようと考えているのではないだろうか？

「気味が悪いんだ」

「は……い？」

「なんか俺、あいつに、心中を見透かされてるような気がしてならないんだよ」

「ああ、そうね」

それは愛美も時々感じることだ。

「そうねってなんだよ！ そうねってのは！」

櫻井がえらい剣幕で怒鳴つた。どうやら愛美の返事は、櫻井の神経をひどく逆撫でしたようだ。

「お前、普通に肯定してんじゃねえ」

恐れに駆られたように、櫻井は愛美に向けて威嚇するように腕を振り上げた。

「別に肯定したわけじゃ……。ただ、櫻井君がそう思うの、よくわかるなって思つたから……」

「お前もそう思うのか？」

愛美は素直に頷いた。

「なら、なんであいつと平氣で友達やつてられるんだよ。お前、気味が悪くないのか？」

櫻井のその発言に、愛美は勢いよく立ち上がつた。

「バシーン！」

衝擊音の後、愛美はジンジンする右手を握り締めた。

櫻井は啞然として赤くなつた頬を押さえていた。

「な、に……？」

「いま自分が、どんなひどいこと口にしたかわからないの。櫻井君……貴方、最低だわ！」

強烈な憤りから櫻井の頬を叩いたものの、これまでひとを叩いたことも、怒鳴りつけた経験もない愛美の身体は、自分の憤りに耐え切れずに小刻みに震えていた。震える足のせいによろめきながら、愛美は部屋を後にした。

叩かれた櫻井は追つてはこなかつた。

彼は最低だ！

愛美は胸に込み上げる哀しい気分を押し殺しながら、二度と彼とは口を聞くまいと心に誓つた。

「愛美い」

教室に入ると、愛美の姿を見つけた百代がすぐに声をかけてきた。右手を上げつつ笑みを見せ、百代はこつちへ来いというように手を振つた。

「百ちゃん、おはよう」

百代の顔を見たせいで、櫻井に対する怒りが煽られたが、愛美はなんとか普通の笑みを浮かべようとした。

「いつもより遅いじやん」

「あ、うん」

「なんかあつたね？」

瞳をキラキラさせて、百代は下から愛美を見上げてきた。何か含みを感じさせる、悪戯っぽい表情をしている。

「な、何も……」

「で、何があつたの？」

百代は愛美の心を読んだように、問い合わせてきた。

こういう微妙なやりとりが、百代を不思議少女に感じさせるのだ。そして百代の勘は……勘といふ曖昧な呼び方に相応しくないほど正確だ。でも、百代の友として、あの櫻井の発言は許せるものではない。

「櫻井、何か言つてきた？」

「えつ？　ど、どうして……？」

「いま、櫻井って名前、口にしたじやん」

「く、口にした？　ほんと？」

「うん。唇が動いたよ。それで、櫻井、なんだつて？」

「く、唇が動いた？」

「ていうかさ……。だいたい予想ついてるんだけどね」

百代が、ニターッと笑つた。

櫻井の言葉に同意などしたくないが……この笑いは、正直薄気味悪かつた。

「百ちゃん、どういうこと？」

「ほら、話したじやない。例の作戦よ。昨日の夜、やつに電話したんだ」

確かに作戦がどうのと言つていたが……

「ちよつとさ、どぎまきさせるようなこと言つてやつたから、わたしのこと、そうとうに恐れてるはずなんだ」

その瞬間、百代の視線が愛美的背後に向けられ、百代は「けへへ」と、とんでもなく気味の悪い声で笑つた。

ゴンガンと派手な音がし、愛美は驚いて振り返つた。

櫻井が無様な姿で床に転がつていた。突然ひっくり返つた櫻井に、男子学生たちが笑いながら群がつていく。彼は百代の不気味な笑いを目にしたのに違いない。

櫻井の情けなさそうなうめき声を耳にし、愛美は後ろめたい気分に取りつかれた。

「百ちゃん、櫻井君に何を言つたの？　彼、ひどく怖がつてたわよ」

百代のほうへ顔をぐつと近づけた愛美は、囁き声で問い合わせた。

「そうでなくっちゃ。まず第一作戦は成功のようね」

「作戦つて、なんなの？」

「今日の帰りに……そうだ。明日土曜で休みだし、予定ないんなら、愛美、うちにおりでよ」

「あ、うん……」

もごもごと返事をしつつ、愛美はもやもやした気分で頷いた。

どうやら櫻井は、百代の被害者だったらしい。愛美は気まずい気分で、すでに自分の席に移動した櫻井を窺つた。櫻井は自分の椅子に座り、頭を抱えて机に突つ伏している。

加害者の百代は、そんな櫻井のことなど気にもかけず、いつも持ち歩いているお気に入りの黒い

本を開き、何事もなかつたかのような涼しい顔で、ページに目を落としていた。

櫻井を気にするそぶりなど、微塵もない友……

櫻井君……ごめんなさい……

心の底から反省し、愛美は謝罪した。

2 ありえないスカウト

放課後、愛美はすばやく教室を出てゆく櫻井に気づいて、慌てて彼の後を追つた。叩いたことを、今日のうちに謝つておきたかった。

一日中ずっとそのつもりだったのだが、そのチャンスがなかつたのだ。櫻井自身が、百代を頑なに避けているせいだろう。

廊下に走り出た愛美は、階段方向に向かつている櫻井の後姿を見つけて駆け出した。櫻井の足取りはまるきり元気がなく、愛美はすぐ彼に追いつけた。

「櫻井君」

呼びかけた愛美の声に驚いたらしく、びくりと肩を揺らし、櫻井はゆっくりと振り返つてきた。ずいぶん顔を引きつらせていたが、背後にいるのが愛美ひとりとわかつて、ほっとしたようだつた。

「なんだよ」
かなり文句がありそうな顔で、櫻井はぶつきら棒に言葉を投げてきた。
「あの、今朝はごめんなさい。叩い……」
突然肩を掴まれ、愛美はぎょつとして言葉を止めた。乱暴な行動に出た櫻井は、愛美のことを睨みつけてくる。
「あ……の？」

彼は無言のまま愛美の背中に手を当て、戸惑っている彼女を、強制的に階段の上へと連れていった。屋上に出たところで、愛美は櫻井から、あらためて睨みつけられた。

「お前な、女に叩かれたなんてことが知られたら、俺の汚券こけんにかかるだろうが」「あ……ごめんなさい。ただ、今朝のこと、謝ろうと思つて……」

「謝らなくていい。あれは俺が悪かつた」

「え？ そ、そんなことは……」

「桂崎を氣味が悪いって言つたことは謝る。けどな……まあ、お前に愚痴ぐちつても仕方がないか」
櫻井は心の中の重いものを吐き出すように、ため息をついた。

「あの、そんなに気にしなくても……。百ちゃん、何もかもわかるわけじやないらしいし……」「あのなあ！」

声を張り上げた櫻井は、愛美的頭を掠めて、壁に力任せに手をついた。

耳元でバンと激しい音がし、愛美はビビつた。

「それって、裏を返せば、少しはわかるつてことになるんだぞ」

「倩みのある櫻井の目に、愛美は笑顔を引きつらせた。

「で、でも、気にするほどじゃないと思うの。勘は確かだけど、内容的にはどつても曖昧あいまいみたいだから」

「救いになんねえよ」

投げ捨てるように櫻井は言い、愛美に背を向けたが、彼の肩はひどく疲れを滲ませているように感じられた。

「とにかく、百ちゃんは、ひとに危害を加えたりしないし……そんなに気にすることないと思うの」

櫻井は愛美に向き直ったが、彼女のいまの言葉を吟味しているのか、むすっとした顔で黙り込んだ。

「確かに、あいつがひとに何かすることはないかもな」

ようやくの櫻井の言葉に、愛美はうんうんと相槌を打った。

唇を突き出して腕を組んだ櫻井は、短い息を吐くと、気分を切り替えようとするように上空を見上げ、何やら含みのある瞳で愛美を見つめてきた。

「ところでお前、保志宮さんと、ほんとに付き合ってるのか？」

「え？」

「あのひと、俺らより十くらいは上だよな。なんかさ、十七、八の女の子とあのひとが本気で付き合うつてのが、どうもピンと来ないんだよな」

「あの、付き合つてないから」

愛美は強い否定を込めて手を横に振った。

櫻井を誤解させたままだったとは……

確かに保志宮輝柾ひさまきは、愛美的彼氏として数回行動を共にした。だが、あれはすべて蘭子の企みのためにそう見せかけただけのことだったのだが……櫻井はそんなことは知らない。

「そうなのか？ でもお前、ドレスアップするどづいぶん雰囲気変わるからな。胸なんか、とくに凄いつつーか……」

「はい？」

とんでもない櫻井の発言に呆気に取られた愛美は、尻上がりに返事をした。櫻井は頬あに指を当て、思案するように愛美的全身を眺めてくる。愛美は、ひどく居心地が悪かつた。

「学園祭、もうすぐだろ？」

「学園祭？ 話が飛び、愛美は戸惑つた。

「あ……うん。そうだね」

「早瀬川、お前モデルやんない？」

なんのことやら理解できず、愛美は返事ができなかつた。

「やりたがる奴はいくらでもいるんだけど、誰でもいいつてわけじやない」

「あ、あの……櫻井君、モデルつていつたいなんのことなの？」

愛美的問いかけに、櫻井は眉を上げて愛美を見つめてきた。その瞬間、彼の瞳に理解の色が浮かんだ。

「ああ、そうか。お前……四月に他校から転入してきたんだもんな。知るわけないか」

「学園祭で、何かあるの？」

「ああ、俺が所属してる報道部の主催で、コス……いや、写真撮影会をやつてるんだ。美術部も協賛して、本格的な舞台も造るんだぞ。凄いだろ」

「凄いだろと胸を張つて言われても、困るというか……」

「主催する報道部としては、最高のモデルを提供したいんだ。つまりお前は、俺が見込んだモデルつてわけだ」

「いや、別に見込まれなくていいし……」

「モデル料、がっかりさせないくらい払うからさ」

とことん本気らしい櫻井の表情……

彼女は顔色を変えて後ずさつた。

この展開はなんなのだ？　なんで突然、こんな話に？

「ありえないから」

「あ、誤解すんな。服脱げとか、水着姿なんてことじゃないって」

そういう問題ではない。いや、そういうことだつたら、もっと大問題だが……モデルをするということ自体が……

「ありえないわ」

彼女ははつきり宣言し、櫻井に背を向けて階段へと向かつた。

「深刻に考えるようなことじやないって、服着てていいんだからさ。ちょっとカメラの前に立つて、

につくり笑う……それでいいんだよ。簡単なことさ」

執拗に説得してくる櫻井に、愛美は呆れた。

「だから、ありません！」

階段の降り口に立った愛美は、大声で言いながら櫻井を振り返った。

彼女はぎょっとした。すぐ目の前に櫻井がいたのだ。

「その代わり、この眼鏡は取つてもらわなきやならないけどな」

櫻井がそう言つた瞬間、愛美の眼鏡は櫻井の手の内にあつた。

「何するの。返して」

「モデルやつてくれるつていうなら、返すよ」

愛美は櫻井の強引さに腹が立つた。

「他の子に頼めばいいでしょ」

櫻井の手に握られている眼鏡に勢いよく手を伸ばした愛美は、身をかわされて倒れそうになつた。慌てた櫻井は、倒れる直前の愛美を抱え込んで救つてくれた。

「ごめん。……でも、お前がいいんだって」

愛美のウエストに手をかけていた彼は、体勢を立て直そそうとしている愛美に手を貸してくれながら、いくぶんすまなげに言つた。

「ほら」

愛美は櫻井が差し出してきた眼鏡を受け取つた。すぐにかけようとした愛美の手を櫻井が掴んで

止めた。

「早瀬川、お前、コンタクトにしたら? そのほうが絶対いいぞ」
言いたいだけ言うと、彼はようやく愛美の手を離した。

眼鏡をかけていつもの視界を取り戻した愛美は、階段を下りようとして、階段下の踊り場にいる蘭子と百代に気づいた。

「蘭ちゃん、百ちゃんも……ごめんなさい。すぐに戻るつもりだったの」「用事は終わったの? 帰るわよ」「用事は終わったの? 帰るわよ」

明るい声で百代が言った。

「うん。それじゃ、櫻井君」

「真剣に考えてくれよな。俺、本気だし。お前じゃなきゃ駄目なんだ。嘘じゃないから」「あ、あのね」

「愛美」

櫻井に完璧に諦めてもらおうと、すっぱり断るうとした愛美は、百代に名を呼ぶれて視線を下にいる百代に向かって話した。

「蘭子の迎えの車も待ってるし、早く帰ろ」

愛美は頷いた。

今日は三人して、百代の家でお茶をしようという話になつてゐる。

「わたし……今日は……駄目だわ」

愛美はいつもと違う蘭子の様子に眉を上げた。蘭子の声は、喉が詰まつたような響きがあつた。
どうも顔色が悪いように見える。

「あら、どうして?」「駄目なの!」

いつたいどうしたというのか、百代の言葉を蘭子は鋭く遮つた。

「わ、忘れてたの。今日は予定があつたの。そういうことだから、悪いけど先に帰るわ」
早口でまくし立てるよう言い、蘭子は階段を駆け下りていった。

「ら、蘭ちゃん?」

わけがわからず、百代のいる踊り場まで下りた愛美は、そのまま蘭子を追おうとして百代に腕を掴まれた。

「百ちゃん?」

「いまは、放つておこう」「どういうこと……?」

愛美は眉をしかめ、いまの状況を頭の中で分析した。蘭子は何かショックを受けたようだつた。
ショックの理由として思い浮かぶのは……愛美と櫻井のやりとり?
もしかして……蘭子は、櫻井と愛美を誤解して?

もしかして……蘭子は、櫻井と愛美を誤解して?
そういうえば、保志宮が仄めかしたことがあつた。蘭子と櫻井……ふたりは……
「櫻井」

まだ階段の上にいる櫻井に百代が声をかけた。

「な、なんだよ」

櫻井はまだ百代を恐れているのか、ずいぶんと腰が引けている。

「グラビアアイドル愛美のマネージャーはわたしだから。アポイントメントはすべてわたしを通すようにね」

櫻井が「はあ？」と大声を出した。

「百ちやん、何言つて」

なぜか百代は、愛美的肩に手を置いて、なだめるようにさすつてきた。

「すべてこのわたしに任せておけば良いのよ。悪いようにはしないって」

愛美は眩暈^{めまい}がした。

私が友ながら、櫻井などより百代のほうが、格段にたちが悪い……と、正直思う。

「すべてこの百代にお任せなさいって」

百代はそう言^いうと、ふつふつふと、ふてびてしい笑いを漏らした。

「違うでしょ。なんかそれって、根本的に違うでしょ？」

「何が？」

叫ぶように言い募^{ひまぐる}つた愛美的言葉を、百代は短い言葉であつさりと受け流した。

愛美は手応えゼロの感覚に、また眩暈^{めまい}を覚えた。

「百ちやん！」

百代は愛美的抵抗を抑え込むように、彼女の頭を脇に抱え込んだ。
「もう、百ちやんてば、離して」
「あのさあ」
「櫻井、なあに？」

百代はじたばたしている愛美と格闘しつつ、櫻井に返事をした。

「いや、藤堂、どうしたんだろうと思つて。……ところで、お前ら、いつからここにいた？」

「わたしと蘭子には、時差があつたとだけ言つておこう」

時差という言葉に、愛美は即座に反応した。

彼女は頭を抱え込まれたまま、ポケットに手を突っ込み、携帯を取り出した。

不気味なキッヒッヒという笑い声を耳にしながら、愛美は携帯の表示を見つめた。

不在着信一件……

愛美はその文字を食い入るように見つめた。

「お前、わざとだろ。わざとそうやって俺を怖がらせて、面白がつてるんだ」

不在着信一件……五分前……五分前……

心と身体がずーんと重力を増した。胸が締め付けられ、息が詰まつた。

「櫻井、いいこと。あんた、わたしになんか氣を取られてると、大事なもの見過^{ごす}わよ」

からかうようでもあり、諭すようでもある百代の声が、意味をもたず愛美的頭に響く……

「な、なんのことだよ？」

「わかつてゐるくせに」

「わっかんねーよ!」

「さ、愛美、帰ろ」

頭を解放され、愛美は百代に促さられるまま歩き出した。

「愛美、よくやつたわ。明日は、何か美味しいもの食べようね」

「何?」

愛美は機械的に口にした。

「あんたどうしたの?」

愛美は足を止め、携帯を握り締めた手で、顔を覆つて泣き出した。

「こいつ……どうしたんだ?」

泣いている愛美の耳に、戸惑つたような櫻井の声が聞こえた。

「俺のせいとか……じゃ……ないよな?」

どうやら彼は、距離を置いたところから、百代に尋ねているらしい。

「まあ、違うんじゃない」

「お前つて、どうして必要な時に限つて、そういう風にひとを不安に陥らせる曖昧な言い方するんだよ」

「大袈裟ね」

大きな声で喚くように言つた櫻井の言葉を、百代は鼻であしらつた。

「櫻井君のせいとかじや……ないから」

愛美は、俯き加減でぼそぼそと言つた。

ショックが強すぎて思わず泣いてしまつたが、もしかすると、不破はまたすぐにかけてきてくれるかもしれない。なのに泣いてなどいたら、思うような会話もできなくなる。

愛美は胸のあたりを撫でさすりながら、自分をなだめた。

「どう、落ち着いた?」

「うん」

「よし、ほんじや、帰ろう」

「なあ、早瀬川」

かなり遠慮がちな櫻井の呼びかけに、愛美は一瞬間を空けて、彼を振り返つた。

「さつきの話、真面目に考えといってくれよな」

さつきの話……?

一瞬、なんのことかわからなかつた愛美は、すぐに思い出した。

「嫌よ、モデルなんて……」

「櫻井、だーかーらー。わたしを通せつて言つたはずよ」

「なんでお前が介入してくるんだよ。早瀬川のことなんだから、彼女が自分で決めることだろう」

「あんた、存外、察しが悪いわね」

「はあ? 察しが悪いだあ」

「直接愛美と交渉したら、百パー断られるに決まってるじゃん。それを、わたしが説得してやるうと言うのよ」

櫻井は、話の流れにきょとんとなつた。

「お前、説得してくれるのか？」

目の前に当の愛美がいるというのに、彼女を抜きにしたやりとりに愛美は憤怒が湧いた。

「百ちゃん、何考てるのよ。わたし、そんなものやりはしないわ」

「まあまあ」

両手を大きく上にあげた百代は、ことを収めるように両腕を上下させた。

「この話は、いまはこれでおしまい、ねつ？」

「百……」

顔をしかめて口を出そうとした愛美は、躊躇いペットにするように、百代からおでこをペチンと叩かれた。不意をつかれて避け切れなかつた愛美は、唇を尖らせながら痛むおでこを押さえた。すでに何度も体験していることなのに、毎度、むざむざ叩かれてしまう自分に腹が立つ。

「物事には、適切な時というのがあるの。わかる？」 櫻井

からかいのこもつた言い含めるような百代の言葉に、櫻井はかなりむかついたようだつたが……。とりあえず何も反論しなかつた。

3 父のぬくもり

愛美は不服を抱えたまま、百代とともに昇降口に向かつた。

表に出たところで、彼女は突然帰つてしまつた蘭子のことを思い出した。

「蘭ちゃん、……いいのかな？」

他に適當な言葉を思いつけなくて、愛美は百代にそう尋ねた。

「いいのよ」

「蘭ちゃんは、櫻井君のこと……」

「自覚したんじゃない。でも否定するだろうけどね。自分に」

「自分に？」

「うん。自分に。ところで、さつき愛美が泣いたのは、彼氏がらみ？」

「あ……うん。電話来たのに……不在着信になつてて……気づいたのがさつきで、五分後で……」

「かかつてくるよ」

「当然のようになつた百代に、愛美はハツとして視線を合わせた。

「ほ、ほんと？」

「うん。感じるから」

こともなげに言われ、愛美の心は躍った。

「いつ、いつかかかる?」

せつつくような愛美的様子に、百代は苦笑した。

「それはわからないわよ。でも、そろそろじゃないの」

愛美は、急いで携帯を取り出した。そして、いつでも出られるように、貫くような視線で携帯の画面を見つめた。

「ね、歩きながらにしなよ」

「あ、うん」

背中に当てられた百代の手で前に押され、愛美は素直に足を動かした。

「それでさ、モデルのことだけ。やらなきや駄目よ」

愛美は瞬きも忘れ、携帯を見つめ続けていた。おかげで、百代の言葉の内容は、ほとんど聞き取れていなかつた。

「あ……うん」

彼女は無意識に相槌を打つた。

「よしつ、そうことなくちゃ」

百代の勢いのある声に、愛美はいつたん顔を上げたものの、すぐに携帯に視線を戻した。しばらく間を空けて、また百代は話しかけてきた。

「あ…………うん？」

「撮影用の服は、わたしが用意するから。あんたは安心して、全部わたしに任せてればいいからね」

携帯は、まだなんの反応もない。
任せてという単語は、愛美的意識に入ろうとして、入り口でストップした。

「あ……うん？　何？」

瞬きしていなかつた目がひりつき、彼女はパチパチと瞬きしつつ、頭に入つてこなかつた百代の言葉を聞き返した。乾いた目が擦れ、じわりと湧いた涙で目が潤んだ。愛美は眼鏡を外して、指先で瞼に触れながら百代に顔を向けた。

「百ちゃん、いま、何か言つた？」

「わたしに任せろって言つたの。わかつた？」

「任……せる……？」

いつたい、百代に何を任せるのだつたか……？

「来たよ」

百代は愛美的携帯を見つめて早口に言つた。

「ええ？」

愛美は慌てて携帯に目を落とした。ピカピカと光る着信の光が、まるで魔法の光のように目に飛び込んできた。

「き、来た」

愛美は叫ぶと、なぜか自分でもわからないが、携帯を持った手を、ぐいっと前に突き出した。興

奮状態に達した友の背を、百代はぽんぽんと軽く叩いてきた。

「ゆっくり話しなよ。わたし、先に帰るから」

その言葉を置いて、百代はすぐに背を向けて校門へと駆けていった。

「百ちゃん、ありがとう」

感謝で胸をいっぱいにしながら、愛美は駆けてゆく友の背に向けて叫んだ。不破から電話が来たのは、百代のおかげのような気がしてならなかつたのだ。

「も、もしもし」

「まな」

即座に不破の声が返ってきた。

安堵と切なさが急激に胸を突き、愛美は思わず泣きそうになつた。

「まな？」

不破の心配を含んだ呼びかけに、愛美はなんとか自分を落ち着かせた。

「わたし……声が聞きたかった」

不破の短い吐息が聞こえた。

「私も……貴方の声が聞きたくてならなかつた……なんでもいい……」

愛美は、不破の声の響きが、ひどく気になつた。彼の言葉が中途半端に途切れたことも……

彼の意識のほとんどは、すでに眠つているのではないだろうか？

「まな……お願いです……何か、話して……聞いていたい……声を……」

「優誠さん」

「……はい」

「眠いのでしょうか？」

「……大丈夫です」

彼の言葉は、ワントンボ以上遅れて返つてくる。

彼は眠いのだ。それもとんでもなく……

アメリカの時間は、もうすぐ一時になろうとしているはずだ。向こうについてから、まつたく寝ていいないとすれば……

「優誠さん、もう寝たほうがいいです」

「ええ。もう少し……貴方の声を聞いて……貴方は……お忙しいんですか？」

「わたしは大丈夫なんです。けど、優誠さんは休まないと。明日の朝はゆっくり寝ていられるんですけど？」

「いえ。どこからか……自分の分身を連れてきたいほど……スケジュールが詰まつて……」

言葉を発することが、彼のエネルギーを奪いでもしたかのように、不破は疲れた長い息を吐き出した。

愛美は顔をしかめた。

不破はいますぐ寝なければならない……彼は疲れ果てている。

「もう休んでください。眠たいのでしょうか？」

「いえ……そんなことは……」

そう□にする言葉も、すでに眠りの中にあるようだ。

「優誠さん、あの、次はいつ電話してもらえますか?」

「貴方の……私は……」

意味の繋がらない短い呟きが続き、愛美は焦りが湧いた。

「優誠さん」

「まな……どうして……まな……」

「優誠さん? ……優誠さん?」

互いの言葉は、まつたく繋がらないものになり、終^{しま}には、不破は何も言わなくなつた。スースーと、ゆつくりと繰り返される微かな寝息だけが聞こえる。間違いなく、彼は完全に寝入つてしまつたらしい。

愛美は青くなつた。国際電話なのに……このまま通話を打ち切らずに眠つてしまつたら……いつたい?

「優誠さん!」

愛美は声を張り上げて彼を起こそうとした。だが、返事はない。

「起きて! 優誠さん起きて!」

声を張り上げて叫んだ愛美は、自分の目の前を歩いてゆく生徒と目が合つた。校門近くで、携帯に向かって大声で叫んでいる愛美を、少なくない生徒が注目しているのに、彼女はいまさらながら

に気づいた。

愛美は、携帯を握り締めたまま校門を飛び出た。愛美が切つてしまえば、通話は終わるのだろうか? でも、終わらなかつたら、料金はどうなるのだ?

やはり、なんとしてでも、彼を起こさなければ……

周りにまつたくひとがいないわけではなかつたが、愛美は立ち止まるごとに、携帯に向かって不破の名を繰り返し呼び続けた。

かなりの時が過ぎたところで、呟くような「まな」という声が聞こえ、愛美はさらに声のボリュームを上げて呼びかけた。

「優誠さん、電話を切つてください」

「あ、ああ。電話……まな、駄目だ……眠くて……」

「切つて、電話切つて」

「ああ……わか……おや、すみ……」

途切れ途切れの、ほとんど息だけの不破の呟き……

「おやすみなさい」

彼女は心と反した言葉を、嫌がる唇から押し出した。不破のけだるく切なげな吐息が耳に届き、そして電話は切れた。声が聞けたのだからと愛美は自分に言い聞かせたものの、淋しくてならなかつた。

「これが……良くないか？」

さんざん時間をかけて吟味したあげく、父はひとつ陶器を手に取った。特別、愛美らしいといえる器だ。

テーブルの上には、これまで愛美が作った焼き物が六個並べられている。大学の推薦入試に、自分の自信作を提出しなければならないのだ。

愛美は素直に頷いた。現役の教授である父の眼鏡に適つたものが一番だろう。それに彼女もこの器は好きだった。黄瀬戸の淡い地に、野花の画があしらつてある。そして効果的に、散らしてある織部の緑が全体の温かみを増している。

愛美の作るものは、大胆さとは無縁だし、意表をついたりもしないが、その素朴さがいいと父は言う。この作品は今年の五月くらいに作り、出来上がりを気に入つてすぐに使おうとした愛美に、父が、これは取つておこうとしまい込んでしまつたものだ。それ以来、父は、出来の良さそうなものがあるとしまい込むようになった。それまでの父はそんなことをしたことがなかつたから、不思議に思つていたのだが……どうやら父は、その頃から愛美の進学について考えていたらしい。

「お父さんは、入試には関わっていないのか？」

徳治が珍しく笑みを見せた。

「焼き物の世界では、私はまだまだ若輩者だ。造形学部には、私より年かさの教授が数人いる」

「面接は、その方たち？」

「そうだ。学部長も同席するだろうし……後は大学部の学園長や理事だろう」

「理事？」

「ああ。何人が面接の場に同席するのかは、私にもわからない」

「わたししがお父さんの娘だつてことは……？」

「麻生教授には、話をした」

「麻生教授？」

「私が世話になつてゐる方だ。後の面々は、私とお前の苗字が同じだと思ったとしても、ことさら

興味を向けてはこないだろう」

愛美は頷いた。

面接というのはひとを萎縮させる。

しかし避けられないもののならば、仕方ないだろう。

「いつものお前でいればいい。面接の受け答えで合否は決まらないさ」

「あがつちやつて、何も話せなくなるかも知れないわ」

「不合格ならそれでもいいさ。きっと、お前の道は他にあるということなんだろう」

愛美は淡々と語られた父のその言葉に微笑んだ。途端に気が楽になつた。

「きっと、そうね」

彼女は、白い布にくるんだ器を木箱の中に丁寧にしまつてゐる父を見つめながらそう言つた。なんとも言葉にならない父のぬくもりに、愛美の心は満ちた。

「さあさあ、お入りよ」

玄関先で元気よく迎えてくれた百代に領き、愛美は靴を脱いで家に上がりさせてもらつた。

「百ちゃん、おば様とおじ様は？」

百代の後について歩きながら、愛美は尋ねた。

「朝っぱら早くから一緒に出かけてったよ。なんか、新しいスーパー銭湯ができたとかで、今日と明日は、半額なんだってさ」

「スーパー銭湯？」

前を歩いていた百代が立ち止まり、愛美のほうを振り返ってきた。どうしたのか、にやにや笑つている。

「百ちゃん、なあに？」

「いや、スーパー銭湯がどんなものかわからないでいるあなたが、面白くてさ」

「お、お風呂なんでしょ？」

「確かにお風呂だよ。スーパーだけね」

つまり、スーパーとお風呂が、一緒になつてゐるわけか？
「お買物ついでに、お風呂に入るの？」

愛美の言葉を聞いた百代は、お腹を抱えて笑い出した。

笑われている意味がわからないでいる愛美を、さんざん笑いものにした百代は、愛美的頭を小突きながら「あんたは、コントのボケ担当かつての」と、突っ込みを入れてきた。

「スーパー銭湯つてのは、サウナとか岩盤浴とか、ともかくいろんな設備があるお風呂屋さんのことだよ」

そ、そうだったのか？

「ス、スーパーって聞いたら、誰だつて……その、食料品とか売つてるお店、思い浮かべると思うけど……」

愛美は頬を染め、物知らずな自分を、しどろもどろに弁護した。

「へいへい」

笑いつつ背中をどんどん叩かれ、愛美はむつとした。

「そんじや、今度さあ、蘭子も誘つて……」

百代は急に言葉を止め、きゅっと眉を寄せた。

「考えたらスーパー銭湯なんぞ行くより、藤堂家のお風呂に入らせてもらつたほうがいいよね。あの家の風呂は、スーパー銭湯なんぞ比べ物にならないくらい、色々取り揃つてるもん」

ひとり納得したように言つた百代は、まだ不服を込めて唇を突き出していた愛美にお構いなしに、

台所へと足を向けた。

「先に部屋に行つといて。おやつ持つてくからさ」

「わたしも手伝うわ」

「お客様にそんなことさせられないよお。それに持つてくのは、お盆ひとつだし」

「お代の姿は、すぐに台所の中に消えた。

愛美はためらいつつ、階段を上つていった。

百代の部屋の中に入り、パタンとドアを閉じた瞬間から、愛美はひどく居心地の悪い思いに囚われた。考えてみれば、百代の部屋にひとりでいるなんて、これまでなかつたのだつた。百代が一緒にいた時は感じなかつた、どちらどころのない心細さのようなものが、胸を去る来るるのはどうしてなのだろう?

異次元空間にいる……そんな感じなのだ。

空気が安定していないというか……部屋の広さが固定していらないというか……いつたい……この部屋に感じるこの感覚はなんなのだろう……?

おやつなどもういいから、いますぐ百代に戻つてきて欲しいところだ。

「まさか……この部屋……なんか、いないよねえー?」

思わず、見えない誰かに問うように、愛美は口にしていた。調子つぱずれの歌のように、声は何度か裏返り、言葉が震える。

愛美は不破からもらつた携帯を急いで取り出し、パカッと開いて画面を見つめた。

不破のことを考えていればいい。百代が戻つてくるまで、不破のことを考えているとしよう。

待受画面の中の不破は、どことなく、問うような目をしている。照れたような笑みを浮かべている不破の写真も好きなのだが、この写真の不破は、愛美的言葉を聞き、やさしく語りかけてくれるようを感じられるのだ。

いま、不破の時間は夜の八時か九時。

今日も忙しかつたのだろうか? もう仕事は終わつたのだろうか?

……寝る前に……電話をかけててくれるだろうか?

ふーっとため息をついて目を閉じた愛美は、ぎよつとして目を開けた。

全身を固くした愛美は、目を見張り、きよときよと部屋の中を見回した。

閉じたはずの視界に、何かが……見えたよね……?

「う、うつそ」

まさか……そんなはずはない……

愛美は自分を落ち着かせた。

百代の部屋が普通でないと思つてゐるために、そんな気がしただけ……そう、きっとそうだ。

彼女は、恐る恐る、また瞼を開じた。

はつ!

愛美は激しく喘いだ。

立ち読みサンプル
はここまで